
ある日、熊さんに出会った話

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日、熊さんに出会った話

【著者名】

Z3386B

【あらすじ】 並盛りライス

ある日、熊さんに出会った。皿のコンビングで……

山が色付くこの季節は、なぜか空気が澄んでいるように感じられる。野山が呼吸をしているからだらうか、それとも、北風の寒さが肺を冷やすだらうか。

赤い球が沈むのも、この頃は早くなってきたし、帰り道が真っ暗な闇に覆われて、おもいがけず夜空を見上げてしまう。季節の移り変わりに疎い私ですら、そうなのだから、動物達は肌で、その事を感じているだらう。

地方都市では、猿が降りてきて話題になつたそうだ。
私が何故、こんなにも秋を感じているかといふと、今現在、進行形で熊に出会つてしまつたからだ。

此處は山ではないし、田舎の畦道でもない。此處は私の家だ。
木彫の熊は豪快に、川を登つてくる鮭を食わえているが、この熊は、鰆缶を食わえていた。

「あの〜。すいませんが、あなたは誰ですか?」

「……」

「此處は私の家なんですけど……」

「……」

「どうやつて侵入したんですか?」

熊は黙つて指を（前足の）玄関の段ボールを差した。

そこには、イキモノでもセイブツでもなく、ナマモノと書いた大きなステッカーが貼つてあつた。

差出人の名前は、父方の祖父で、宛先は間違いなく私の家だつた。
そして、熊といつても、どう考えたつて着ぐるみの熊だつた。耳が頭頂部に付いていて、眼を見開いたまま凝視している。何より、二足歩行をしている時点で本物の熊ではなかつた。

「……」

私はもう一度、冷静にその熊を観察して言った。

「どちら様ですか？」

私は怖かった。本物の熊と出会った事よりも、自分の家で、着ぐるみの熊に出会つことの方が怖かった。

「強盗ですか？」

「……」

「ドッキリ？」

「……」

「そうだ、妻はどうしたんだ？もしかして食べ……何処かに監禁したとか？」

「……」

「なんとか言つたらどうなんだ。この……熊……」

「……」

私は怖かつた。意味が解らない事が怖かつた。

私は、ある私立大学の教授だ。私が教えているのは『ある限定地域における民族意識の変化とその推移』だ。最近は、何ら感慨も沸かないような論文を発表したが、大した批判も受けずに教授をやっている。

「ただいま」

妻が帰つてきた。2という数は、どちらかが一方的に働きかけるか、二者による相互的な働きかけの往復に終止してしまいがちだ。しかし、これが3になると、より流動的な関係になる。つまり、妻が帰つてきたのだ。

「あら、もう届いたのね？」

熊を見て、妻が言つた。

「届いた?どうこうことだ?」

「……」

熊は、ゆっくりと妻の方を見た。

「さつき御父さんから電話があつてねえ、ボケたじいさんが間違つ

て熊を送つたつて……」

「間違つて？何を間違つたら熊が届くんだよー？」

「ちょっと、怒鳴らないでよ。あら、意外と可愛い顔してるじゃないい」

「いや待て、コイツは熊ですらない。これは熊の着ぐるみじやないか？」

「……」

私は、ネクタイを外しながら妻に言った。

「いいじやない、家族が増えたと思えば……」

「家族？こんな不得体の知れない着ぐるみを被つた人間を家族だと！」

「？」

私は、机に拳を叩き付けた。

「何を感情的になつてるのよ。前から犬か猫でも飼いたいな、なんて言つてたのは貴方じやない」

「犬か猫だと、コイツは、いやコレは人間だろ？誰かが中に入つてるんだ」

「……」

私は、熊の着ぐるみの頭に手をかけたが、熊は両手で私の手を強く振り払つた。

「……」

「危険だ。見てみる、コイツは私の手を叩いたぞ」「怖がつてゐるだけよ、ほらこっちに来なさいな」

妻が椅子を差出すると、熊はそれに従つた。

「椅子に座る熊なんて聞いたことないよ

「行儀がよくて良いじやないの」

早くも、洗脳にかかる妻を見て、私は危機を感じた。

「こんな熊なんて、捨ててこよう」

「でも、せつかくオジサマがくださつたモノだしねえ」

「……」

「とにかく君、顔をとつて話し合おう、条件によつては家に住ましてやつても良い。だが顔を見せてくれないことは、フェアな話し合いはできないだろ?」「うう」

私は幾分か冷静になつた頭で、事に対処しようと考えた。私が、この熊の着ぐるみを着た男。いや女かもしれないが……を人間として考えるから、話が混乱するかも知れない。

「動物を飼うつていうのはな……一生、こいつの世話をする責任を負うことになるんだ。エサ代だつて熊なんだから馬鹿にならないしおしつけだつて一筋縄じゃいかないんだ」

「そうね……熊つて何食べるのかしら」

「もし、何かのミスでこの熊が近所の人間を傷付けたり、散歩中に暴れだしても、私達にはどうすることもできない」

「そうね、なんだか怖くなつてきたわ」

もう一息だ。妻も、だんだんと否定の方に傾いてきている。

「熊を飼うなんて無理なんだよ、じつゆうのは専門の飼育員じゃないと……」

ピンポーン

「はーい、今行きまーす」

妻はさつと玄関に向かつた。自然と、リビングには椅子に座つて正面を凝視している熊の着ぐるみを着た何者か、と自分の一人だけになる。

「なあ、しゃべつてみろよ。妻がいない間に、一言ぐらいなら大丈夫だつて」

「……」

「よし分かつた、この鮭缶をやろう」

「……」

「喉が渴いただろ?、お茶でも飲むか?」

「……」

観察してみると、熊の表情は半笑いのまま動かず、見ているもの

を、恐怖と不安に陥れるには十分だった。しかし森ではないし、熊さんに出会つたら死んだフリが原則だ。

「……」

「なんだよ、睨んでるのか？それとも、その仮面の下で薄笑つているのか？」

「……」

コジングはやけに静かで、さつきから私の独り言が虚しく響くだけだ。

「もういい……疲れた。」

「ねえ、あなた」

「ん…何だよ」

「今ね、運送会社の人がきてね。手続きのミスで熊の木彫と本物の熊を間違えたらしいのよ」

「手続き？じいさんが送ったんじやないの？」

「どうやら違うらしいわ」

「ガオー」

「うわ、ちゅう、じうしたんだ、わきあまでおとなしかったの」「ついにキしたんじやないの？」

「お前は何で、そんなに冷静でいらっしゃるんだよ」

「あ、おとなしくなった」

熊は、一聲上げただけで椅子に座つたままだ。

「もう我慢できない、間違つて送られたなら、送り返そ？」

「でも、疲れたわ。明日にしましょ？」「う

「そうだな。今日は、さつひと寝よう」

熊は椅子に座つたままおとなしくしてくる。私達は、寝ることにした。

「おやすみ」

「……」

「おやすみなさい」

部屋が真っ暗になつて、私が寝かけると、リビングから何か聞こえてきた。

「ふあ〜、よく寝たな。ここはどこだ？」

私は電気を着けるのを躊躇つたが、暗闇のなかで熊の頭部が外されたのが分かつた。

「やっぱり人間じゃないか。絶対そうだと思つたんだ」

私は、喜々として立ち上がり、照明の紐を引っ張つた。そこには、熊の頭を右わきに抱えて立つている異形の生き物がいた。

一本足で立つ真っ白いヌルヌルとした顔の、頭の大きなその生物は「いけね、しゃべっちゃつた」

と言つと、窓を開けて闇の中に消え去つた。

私はこの体験を論文にまとめたが、アホらしくなつて小説にした。あの生物が、宇宙外生命体だったのかどうか、いまだに判断しかねるが、熊の頭部は今も自宅の玄関で宙を凝視している。

(後書き)

シユールに仕上げるつもりでしたが、どうしても脱力的なコメディになってしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3386b/>

ある日、熊さんに出会った話

2010年10月8日15時41分発行